
戦争と史料 ―マレーシアの文書館を訪ねて―

安藤 正人

はじめに

「第二次世界大戦時及び戦後の日本植民地及び占領地における記録史料の取扱いについて」という長ったらしい研究テーマで、日本学術振興会の東南アジア諸国派遣研究者に採用していただき、1996年12月に3週間ほどマレーシアに行ってきた。

最初カラユキさんが、そしてあとからヘイタイさんがやってきたなどといわれ、東南アジアは昔から日本と縁の深いところである。しかし日本の占領時代に現地の記録史料が大量に焼かれたり持ち去られたりしたために、深刻な歴史の空白が生じている。アーキビス

トの眼でこの事実を歴史的に検証し、失われた歴史の「復元」にどんな協力ができるかを考えてみたいというのが、研究テーマの意図である。

マレーシア国内で研究の実施を希望する外国人研究者は、マレーシア政府の研究許可書を取得しなければならない。この手続きには、大使館に何回も足を運んだりして、たっぶり6カ月は要するらしい。私は実はそのことをまったく知らなかった。たまたま出発2カ月前になって、ある東南アジア史研究者から研究許可書のことを教えられ真っ青になった。その東南アジア史研究者は「まあ今回は初めてなんだから下調べのつもりであちこちゆっ

くり見てくれば？」と慰めてくれたが、学術振興会のお金で行くのにはまさか3週間遊んでくるわけにはいかない。私は必死の思いでマレーシア政府に特別の配慮を求める嘆願書を書いた。マレーシア国立文書館の知り合いにも口添えをしてもらった。その結果、マレーシア国立文書館とサバ州立文書館の2館に限るという条件で特別研究許可がおりることになった。

欧米の文書館に行くのと同じような気持ちでいたのは、完全に私のミスである。これではアジアを研究する資格はない。最初から大いに反省させられた。

1 マレーシア国立文書館

遠くて立派な文書館

クアラルンプールは2度目である。前は1990年、国際文書館評議会(ICA)東南アジア部会(SARBICA)の総会に出席するため日本の友人3人と来たのだが、何をまちがえられたか空港にベンツが迎えに来るというVIP扱いで、滞在中もほとんど出歩けなかった。今回は一人の気楽な旅だから、ずいぶん町中を歩き回った。とにかく多いのがバイク。北京は自転車の洪水で驚いたが、クアラルンプールでは自転車はほとんど見かけず、かわりにバイクの洪水である。それとミニバス。ミニバスについては、あとで書く。

一人旅で困るのは食事である。レストランに入るのもおっくうだし、東南アジア名物の屋台も一、二度のぞけばまあ十分である(胃腸に自信もないし)。さいわいホテルの前に「クアラルンプールそごう」があり、たいていここで何か買ってきてはホテルの部屋で食べた。もちろん日本食もふんだんにあり、回転寿司まで店開きしていたのには驚いたが、そのお世話にはならなかった。

市街地の西側には広大な森のような緑地帯が広がっていて、首相官邸や官庁の建物がその中にポツンポツンと点在している。マレーシア国立文書館 Arkib Negara Malaysiaもそ

の一面に建っている。バス便もあるにはあるらしいのだが、よくわからないから、毎朝ホテルの前でタクシーを拾った。道がすいていれば国立文書館までは10分くらいでメーター料金なら3リンギット(約150円)ほどである。ところが、3台に1台くらいメーターを倒さないタクシーがいる。こういうのに乗り合わせた場合は、メーターを倒せと命令するか、それでダメな場合は料金を交渉して決めてしまわなければならない。最初はわからないから15リンギットもふっかけられた。何とか10リンギットまで値切ったが。

帰りがまた大変だった。国立文書館があるところは流しのタクシーが走っているような場所ではない。一度は文書館の人にタクシーを呼んでもらったが、二度三度というわけにはいかず、最後は結局自慢の足にモノをいわせてジョギングで帰ることにした。近道を走ったので意外と早く帰れたが、12月とはいえ連日気温30数度湿度85パーセント以上という気候である。汗グッショリでホテルに着いた。

こんなに不便では一般の人が気軽に来られないだろうな、と感じながら国立文書館に入る。マレーシア国立文書館はICA発行の文書館建築の本にも紹介されている近代的な建物で、広い閲覧室にはマホガニーのテーブルがずらりと並び、実に落ち着いた印象である。ところが閲覧者はせいぜい日に一人か二人。一般市民が気軽に利用しているような様子はない。私は7日間通ったが、ほとんど貸し切りに近い状態だった。それにしても冷房のききすぎで寒いのはまいった。できるだけ冷風があたらない場所を求めて、毎日あっちの席こっちの席とウロウロ移動した。

閲覧室には出納担当の職員が一人か二人、レファレンス担当のアーキビストが一人、それにコピー担当の人もいるが、利用者が少ないせいかあまり姿を見ない。

2602年のファイル

マレーシア国立文書館は、連邦政府と州政府

府の公文書記録を中心に膨大な記録史料を保存し公開している。私の研究テーマに関係すると思われる記録史料群には次のようなものがある。

- British Military Administration Records
(英国軍政府 (BMA) 文書、1945-46年)
- High Commissioner's Office Records
(英国高等弁務官文書)
- War Damage Commission Files
(戦争被害調査委員会ファイル)
- Report on the Public Records of the Federation of Malaya and of the States and Settlements (P/NAM/2) (マラヤ連邦等の公文書記録に関する報告書)
- Selangor State Records
(セランゴール州文書)
- Kelantan State Records
(ケランタン州文書)
- Pahang State Records
(パハン州文書)
- Negri Sembilan State Records
(ヌグリセンビラン州文書)

上記のうち7日間で閲覧できたのは、英国軍政府 (BMA) 文書のうち23ファイルと、セランゴール州文書の中に含まれる日本占領時代の州政庁官房文書2ファイル、その他1ファイルの合計26ファイルだけである。

英国軍政府 (BMA) 文書からは、日本占領期における史料の廃棄や移転の事情および残存文書の状況を、戦後、Monuments, Fine Art & Archives Section (記念物・美術・記録史料課) が中心になって調査したレポートなどを多数発見できた。詳しい分析はこれからだが、たとえばシンガポールのラッフルズ博物館に保存されてあった記録文書がどうなったか、などについて興味深い史料がある。

地方行政文書はセランゴール州政庁文書を見ただけだが、目録を年代順にたどっていくと1941年の次がいきなり2602年になっているのでビックリする。占領期には日本の皇紀が公に使われているのである。文書のファイル様式は英国式のままだが、表紙の Selangor

Secretariat という表記が Selangor Syuseityo Kanbo (州政庁官房) という日本語に変わるのが目立っている。公文書には次第に英語が使われなくなり、マレー語が中心となる。まれに日本語の文書が混じっている。

私が閲覧した“2602年”のファイルには、イギリス軍がシンガポールに疎開させたセランゴール州政庁文書の返還問題についての記録が含まれていた。極めて重要な史料で、色めき立った。

SECRET

たいていの文書は簡単にゼロックス複写してくれる。アーキビストとしては少し心が痛むが、めったに來られない外国人利用者の立場からすると誠にありがたい。400枚くらいお願いしてしまった。ところが、どうも「秘密文書」の取り扱いがいかげんである。閲覧に供している文書は原則としてコピーもOKのはずだと思うのだが、文書に“SECRET”という大きなゴム印がおしてあったりすると、中には (みんなではない) コピーをしてくれない複写係がいるのである。いやこれは昔のことであって今はもう解除されているはずだから云々・・・と主張してもムダであった。しかし“SECRET”の印が文書の1ページ目にしかおしてなければ、2ページ目からは平気でコピーしてくれるのである。それで私は1ページ目だけ手で写すはめになったわけであるが、このあたり、もう少し職員の教育を徹底する必要があると感じた。

2 サバ州立文書館



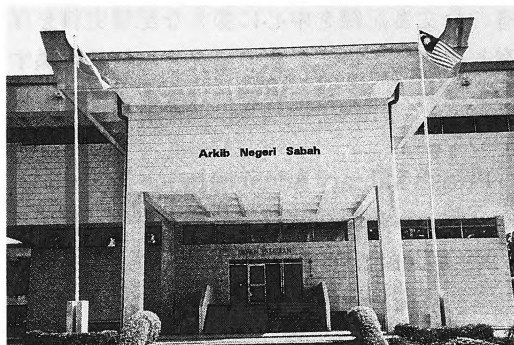
ミニバスは家族経営

クアラルンプールからボルネオのサバ州に飛び10日間を過ごした。州都コタキナバルは「キナバルの町」という意味だそうで、郊外の空港に降り立つと、はるか町の背後の雲間に東南アジア第一の高峰キナバル山が、山崎朋子が『サンダカンの墓』で恐竜の背中のようにだと描写したギザギザの稜線を見え隠れさせている。

コタキナバルは英領時代にジュッセルトンといったのを日本がアビ（亜比）と改名した。戦後コタキナバルになったが、今でもバスの行先表示などには「亜比」と書いてある。昔も今も中国系住民が多いらしく、町には漢字があふれている。

州都といってもクアラルンプールにくらべると本当にこじんまりとした港町で、繁華街は海岸通りと並行に2、3本あるきり。端から端まで歩いて20分とかからない。海岸通りには大きな市場があり、一日中人人人でごった返している。市場のとなりはミニバスのターミナルになっている。ターミナルといっても要するにただ広い空き地で、市場の人の数に負けないくらいのもすごい数のミニバスが群れている。

クアラルンプールでは結局乗らなかったが、コタキナバルではサバ州立文書館への行き来にずいぶんミニバスのお世話になった。マイクロバスくらいのからワゴン車をちょっと改造したようなものでいろいろあるが、たいていは相当年季の入ったボンコツ車で一台一台が個人経営だという。車掌はほとんど小学生か中学生くらいの男の子で、運転手はたぶんお父さんかお兄さんなのであろう。停留所では何台ものミニバスが客の争奪戦を演じ、稼ぎに影響するから座席が埋まるまでなかなか発車しない。しかしいざ走り出すと、ロックミュージックなんかをガンガン鳴らしながらすっ飛ばす。なかなか元気の出る乗り物であった。車掌の子供たちは学校には行かないのだろうか、それが少し気にかかったが。



3時間の昼休み

サバ州立文書館Arkeb Negeri Sabahを調査先に選んだのにはいくつかわけがあるが、前館長ジョアンナ・キシーさんをよく知っているというのが一番大きな理由である。前館長といっても私よりずいぶん年下で、13才から3才まで5人の子供たちのお母さんである。1988年にパリでICA大会があったとき以来のおつきあいだが、1995年秋に国際交流基金の招聘で来日し、全史料協関東部会で話をしてもらったことがある。その時のジョアンナの話は『アーキビスト』37号に掲載されている。異動で今は別の部局にいるが、早くアーキビストに戻りたいそうである。とにかく、ジョアンナの知り合いだということで、サバ州立文書館ではたいへん親切にもらった。

サバ州立文書館は正職員が20人ほどいる結構大きな文書館である。建物もなかなか立派で、正面入口の大きなホールは展示スペースになっている。閲覧室は4人掛けのテーブルが六つほどと、壁際の少し高い机で合計30席くらい。マイクロリーダーも3台置いてある。利用者は日に3、4人とやはり少ないが、そ



それでも閲覧室が小さい分だけクアラルンプールの国立文書館よりはにぎやかな感じがする。閲覧係はアイビー・フーさんという中国系の元気な娘さんで、音楽好きなのかコピー器の上にラジオを置いて一日中かけっぱなしであった。マレー風音楽が多くて、なかなか良かったが。

ちょっと驚いたのは閲覧時間である。朝の開館はずいぶん早くて8時15分、閉館は16時である（土曜日は午前中のみ開館）。それだけならふつうより1時間ほど上にずれているだけだが、問題は昼休みである。月曜から木曜までは12時半から14時15分まで、金曜日は（たぶんイスラム教の関係と思うが）何と11時から14時15分まで実に3時間15分が昼休みとなり、その間利用者は建物の外にでなければならないのである。私は最初そのことを知らず、アイビーも何も言わないから（言っただけ私に理解できなかっただけかも知れない）12時半を過ぎても平気で仕事を続けていた。そのうち私以外の閲覧者が誰もいなくなり、閲覧室のライトが半分消えて暗くなり、アイビーはカウンターで居眠りを始め、ようやくおかしいと気づいた次第である。

しかし2時間3時間という昼休みは困りものである。外は猛暑。そのうえ近くにレストランもない郊外ときている。文書館の庭に小さな食堂があるにはあっておばちゃんが焼き飯なんかを作ってくれるが、お世辞にもおいしいとはいえず利用したのは一度だけ。あとは、20分ほど歩いたところにあるサバ州立博物館（これはなかなかすばらしい博物館であった）で時間をつぶしたり、ホテルまで帰って休んだりした。こういう調子だから、仕事の能率はそれほど上がらなかった。

ピンクファイル

サバ州立文書館は、サバ州政府各部局ならびに郡庁の戦後公文書を中心に所蔵している。戦前のものはすべて戦争で失われたということである。戦後公文書は残念ながらまだ公開に至っておらず、現在のところ一般公開



されているのは、North Borneo Central Archivesと呼ばれている北ボルネオ特許会社の事務文書だけである。ファイルの表紙が桃色なので文書館では“ピンクファイル”と通称している。この文書群は大半が1942年の日本占領以前のものである。北ボルネオ特許会社は、第二次大戦後サバ州が特許会社領からイギリス政府直轄植民地になった際に、記録文書をほとんどロンドンに移送した。それらは英国国立公文書館Public Record Officeで公開されている。サバ州立文書館にあるピンクファイルがなぜ現地に残ったのか、そのいきさつは今のところわからない。

ピンクファイルのなかには私の研究テーマに直接関係する文書はそう多くは含まれていなかったが、北ボルネオ特許会社における記録文書の保存に関するロンドンとの往復書簡（1930年代）をはじめ、いくつか興味ある史料を発見した。それから、たまたま2602年（昭和17年）11月7日付けの新聞（SANDAKAN NIPPO サンダカン日報）を1枚見つけた。これは、文書館の人がいうには、日本占領期の新聞として唯一残っているものではないかということであった。

サバ州立文書館では、1995年に「日本の占領」展を開催した。記録史料の破壊がマレー半島以上に徹底しているため、展示資料の収集には苦勞したそうである。責任の多くは日本軍にあると思われるが、戦争末期の連合軍による空襲も記録史料が残っていない原因の一つである。文書館では記録の空白を補うため、東南アジアの多くの文書館がそうするように、オーラルヒストリー・プロジェクト

トに力を入れている。日本占領期についても1995年の展示会を機に聞き取りを集中的に実施し、展示図録に29人の話が掲載されている。オーラルヒストリーの記録は一人一人ファイルされて、閲覧できるようになっている。

おわりに

ジョアンナの故郷は、コタキナバルから車で3時間くらい山の中に入ったところにあるタンブナンというカダサン族の村である。日本占領時代は抗日ゲリラの活動が盛んだったところだと聞いた。クリスマスに、招かれてここで2日間を過ごした。

カダサン族にはカトリック信者が多い。クリスマスイブの夜、教会には村中の老若男女が着飾って集まり、入りきれない人々が庭にあふれるほどであった。私はジョアンナの客人だということで（ジョアンナの実家は村の名家らしい）、やはりジョアンナに招かれて来ていた英国人の老夫婦、スウェーデンとオーストラリアの二人の青年とともに、一番前の席に座らされてミサにあずかった。賛美歌の伴奏はギターとキーボード。小さな子供たちが祭壇のまわりをドタドタ走り回ったりその辺で踊り出したり、なかなかにぎやかな真夏のクリスマスミサであった。

教会から帰ると、ジョアンナの夫ジュドの実家に一族が集まって午前2時頃まで大パーティである。このとき英国人老夫婦のご主人のほう（ジョンという）とひとしきり話をし

た。彼は1951年から20年間あまりイギリス軍将校としてサバにいたのだそうである。よく聞いてみると、主に地理調査部門に属し、最後はその長をつとめたという。地理調査部門というのは土地測量と地図の作製などが任務で、軍事上行政上きわめて重要な記録を抱えている。だから日本軍がシンガポールに迫ったとき、同地のイギリス軍は地理調査部門の記録類を必死の思いでオーストラリアに移送したのである。それに関する史料を、私はクアラルンプールの国立文書館と英国オックスフォードのローズハウス図書館で見ている。

そんなことを話しながら、私はボルネオの様子をジョンに聞いてみた。とくに戦後、日本軍が占領中に作った地図記録などをイギリス軍が押収したかどうかを知りたかった。彼は、サバに赴任した時すでに戦後かなりたっていたからその辺のことはよくわからないと答えたが、それでもいくつか関係ありそうな本の名前などを教えてくれた。

帰国する数日前、サンダカンに足を延ばした。この町も戦争で徹底的に破壊され、記録史料はまず残ってないだろうという話である。私は連合軍捕虜2600名が命を落とした“サンダカン死の行進”で知られる捕虜収容所跡を郊外にたずね、それから町の裏手の山に登って日本人墓地を訪れた。日本人墓地では、天草の友人のために、からゆきさんのお墓の写真は何枚か撮った。これが今回の調査旅行の最後の写真となった。

（あんどうまさひと・国立史料館）